

# 社会参加のための翻訳を 通じた新たな学びの可能性

---

中川正臣（城西国際大学）・澤邊裕子（宮城学院女子大学）

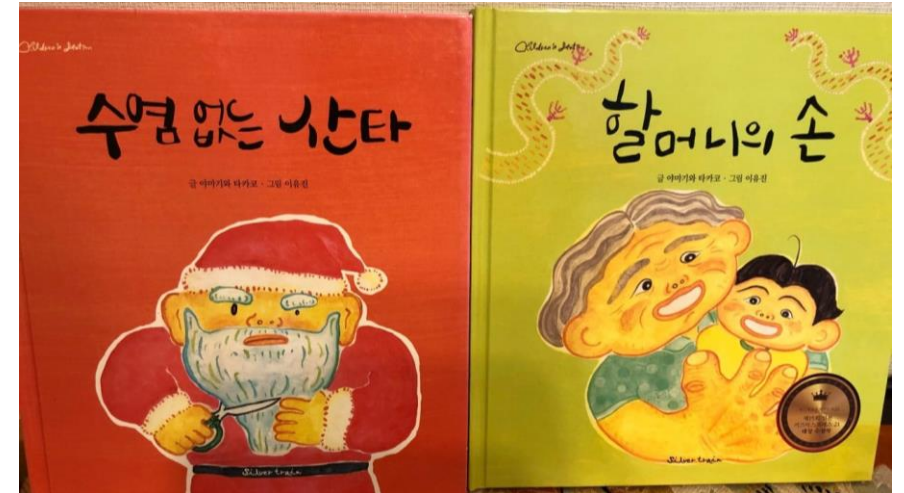
2021年3月4日 15:15-15:45

第20回外国語授業実践フォーラム（オンライン開催）

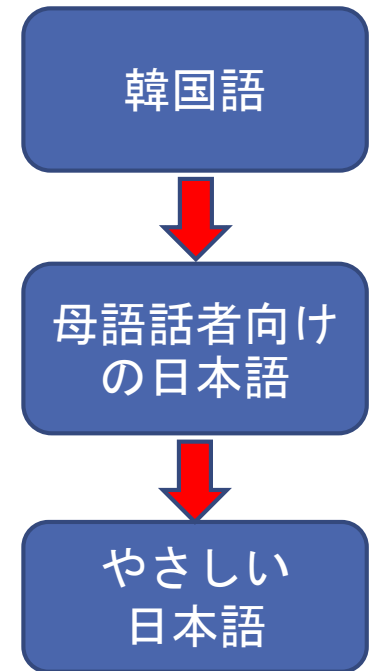
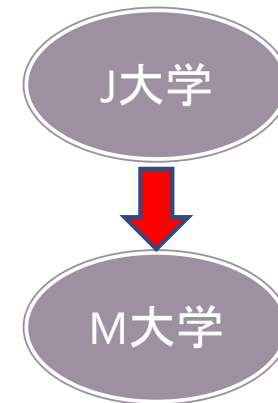
# 本発表の目的

城西国際大学（以下、J大学）の学生と、  
宮城学院女子大学（M大学）の学生の協働  
による韓国絵本プロジェクトの実践報告  
を通し、本プロジェクトを通じて得られ  
た学びとその意義について論じること。

# 韓国絵本プロジェクトとは



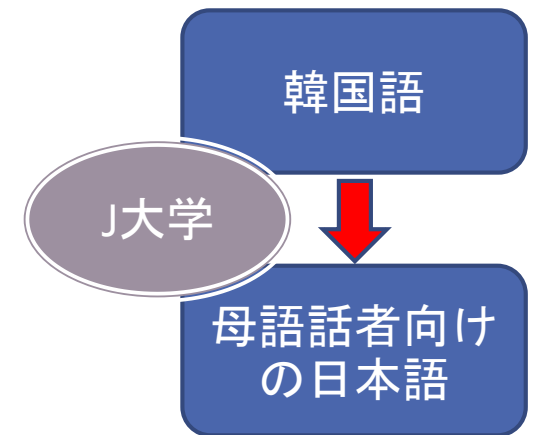
- ・2つの韓国絵本を韓国語から母語話者向けの日本語へ、さらにはやさしい日本語へ翻訳（書き換え）し、社会に発信するプロジェクト



# なぜこの実践を始めたか (1)

J大学 日韓翻訳クラス ➡ 日韓交流ゼミ

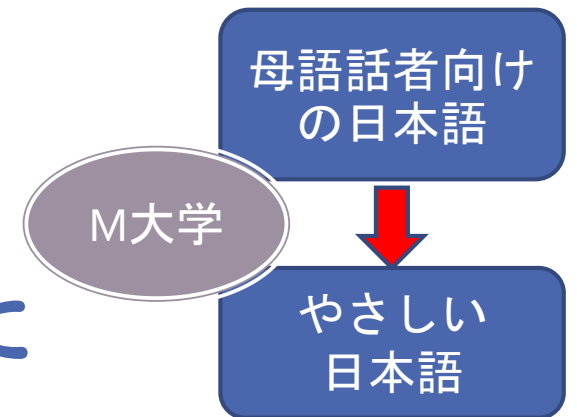
- ・韓国絵本の魅力を伝えたい
- ・母語話者向け日本語とやさしい日本語の読者を意識した翻訳技法を身に付ける



# なぜこの実践を始めたか (2)

## M大学 日本語教育ゼミ

- ・多文化共生社会でますます重要度が増す「やさしい日本語」の担い手に
- ・日本語学習者が楽しく読める様々なレベルの日本語多読素材づくりの担い手に



# なぜこの実践を始めたか (3)

## J大学とM大学の共通のねらい

- 多文化共生社会において翻訳という社会的営みが人と人を仲介するために重要な役割を担っていること
- 韓国語と日本語という異なる言語の間だけでなく、日本語の中でも異なる変種があること

(「仲介」についてはCEFR 2018を参照)

上記内容を実践を通じて学ぶ

# どんな実践を行ったか

前半

2020年  
11月～12月初旬

韓国語  
→母語話者向けの  
日本語

J大学  
2年生対象  
「日韓翻訳技  
法I」クラス  
37名

2020年12月初旬～  
2021年1月

母語話者向けの  
日本語  
→やさしい日本語

M大学  
日本語教育  
ゼミ7名

後半

2021年2月初旬

オンライン  
意見交換会

J大学11名(2年生と交換留学生)  
M大学7名合同ゼミ

2021年2月下旬

オンライン  
読み聞かせ会

# 学生たちの学び・プロジェクトの意義

## 〈分析資料〉

- ・J大学の学生とM大学の学生の成果物（翻訳）
- ・期末アンケート/期末レポート
- ・読み聞かせ会終了後のアンケート

J大学：11名分

M大学：7名分



## プロジェクトで扱った内容（J大学 前半）

- 絵本の背景を理解する（作者のインタビュー動画、作者への問い合わせなど）
- 韓国語を母語話者向けの日本語に翻訳する
- やさしい日本語についての学習する
- 母語話者向けの日本語とM大学から送られてきたやさしい日本語の比較

# 翻訳例



原文の敬語使用を反映した訳と、親密さをあらわすために敬語使用を回避した訳

G10: 「クロさん、どうして ひげを きっているんですか？」

G9: 「クロさん、ひげを切（き）ってどうするの？」

クロさんの人柄をあらわす語尾

「子(こ)どもたちは わたしのことを “サンタクロース” とだけ よぶじゃろう？ でも じつは、そうよばれるたびに わたしは とても さびしいんじゃよ。」

# 前半においてJ大学の学生に見られた学び

- 日本語母語話者（子ども、大人）を意識した翻訳

「絵本を読む人」「読み聞かせをする人」「読み聞かせを聞く人」  
を意識した翻訳

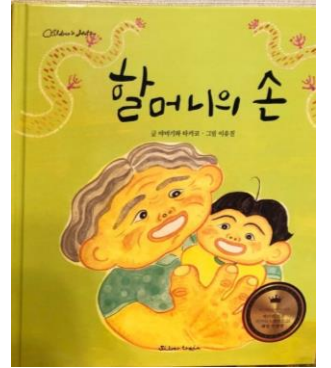
- 翻訳であらわれる目標文化の「受容化」と「異質化」（山田, 2020)

原文の韓国語とは異なり、くだけた表現を使って登場人物間の親しさや人間関係を表す「受容化」と原文にある文化（上下関係）を表現するためにあえて敬語を使用する「異質化」

# プロジェクトで扱った内容 (M大学 前半)

- 多文化共生社会と「やさしい日本語」についての学習
- 日本語多読教材の分析
- 韓国絵本の翻訳版をやさしい日本語にリライトする  
演習 (NPO多言語多読の語彙表、文型表を参照)

# リライトの例(1) 『おばあちゃんの手』



## ・ (リライト前)

G1: テスはすこし悲しいきもちで、「もっといろいろなこと学びたかったのに。」といました。

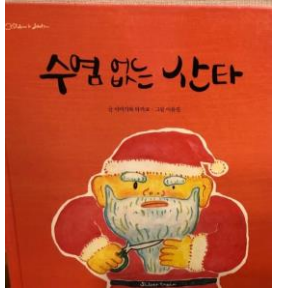
G2: テスは少しさみしい気持ちで「もっといろいろ知りたかったのに」といました。

G3: テスは すこし さびしい きもちで 「いろいろな ことを もっと べんきょう  
したかった」と いました。

## ・ (リライト後)

テスは すこし さびしい きもちに なりました。「もっと いろ  
いろな ことを べんきょうしたかった」と いました。

# リライトの例(2) 『ひげのないサンタ』



- (リライト前)

G4: 「クロさん、何をされているのですか？」

「何をしているって、髭を切っているのだよ。」

G5: 「クロさん 何しているの？」

「何って ひげを 切っているんじゃないよ。」

- (リライト後)

「クロさん なに を しているの？」

「なに を しているか？ ひげを きっているんだ。」

# 前半においてM大学の学生に見られた学び

- 読み手（日本語学習者）に配慮したリライト必要性の認識  
単語・表現の選択、一文の長さ、文体、表記の仕方など
- 日本語の多様性、特徴、文化への気づき  
類義語、文の長さ、韓国と日本の文化の違いなど
- 「やさしい日本語」の定義づけ  
日本語学習者向け⇒母語話者も含め多様な個人に対応するもの

# 合同意見交換会（J大学 & M大学）

目的：学習過程が異なる両大学の学生間でここまでの気づきを共有するとともに、成果物を社会にどのように発信するかを話し合う

- ・翻訳、リライトする際に、どんな点が大変だったか。
- ・翻訳、リライトする際に、どんな点を工夫したか。
- ・成果物を社会に発信するアイデアとして、どのようなものがあるか。

J大学の学生とM大学の学生混合の  
3～4人のグループで意見交換（zoom）



## 翻訳、リライトの際に苦勞した点と工夫した点の共有（例）

### J大学（韓国語→母語話者向け）

- **韓国語のニュアンスを崩さないように**自分と祖母の会話を思い出しながら訳した
- 登場人物の関係性や雰囲気はどう表現するかを考えた
- 自分たちが訳した文について第三者（家族）の視点を取り入れた

### M大学（母語話者向け→やさしい日本語）

- グループによって異なる表現の統一した
- やさしく書き換えたいのに、より複雑になってしまった
- **ストーリーを変えずに**、レベルに合わせたリライトした

# 学生たちが考えた社会発信のアイデア

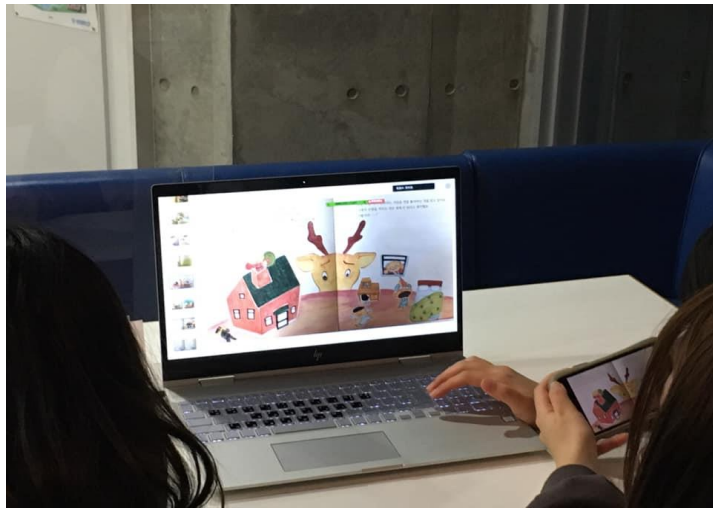
- 子育て支援施設などへの寄贈
- 読み聞かせの音声や絵本と訳文をネットで配信
- **読み聞かせイベントの開催**

など様々なアイデア



# 読み聞かせの練習（J大学の例）

- 読み聞かせ方法の検討と練習（役割分担、間の取り方、登場人物の声、イントネーション、わくわくスポットなど）

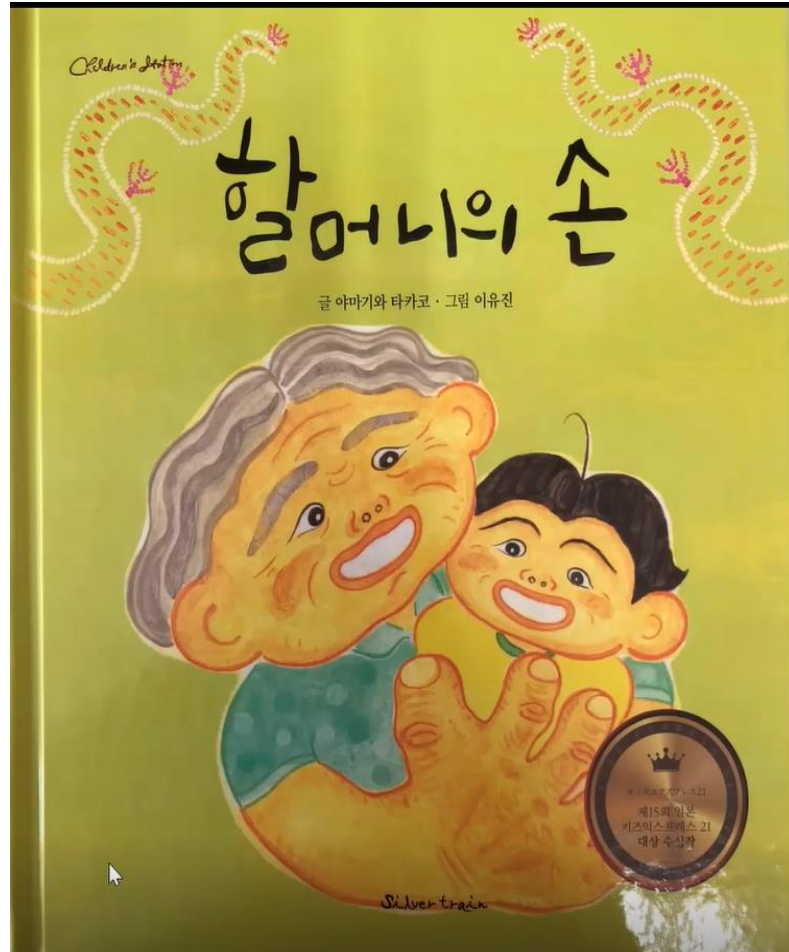


個人情報保護のため  
写真は発表時に公開  
します

# オンライン読み聞かせ会 (J大学&M大学 パイロット版)

- ・参加した親子：日本から2組、韓国から2組
- ・①韓国語版と②母語話者向け日本語版、③やさしい日本語版を準備して、参加した親子が希望するバージョンでの読み聞かせを実施

# オンライン読み聞かせ会の様子



## おばあちゃんの手

文：やまぎわたかこ  
絵：イ ユジン

個人情報保護のため  
写真は発表時に  
公開します

## 読み聞かせ会参加者の反応（保護者の声）

- ・子供たちが楽しんで聞けるように、いろいろと工夫されていた。
- ・この韓国語絵本の購入をして、家でも読み聞かせをしたい。
- ・（同じ絵本でも）3回は必要かなと思う。1回目は子どもにとっても聞くりハーサル。数回読み聞かせをすることによっておもしろくなる。
- ・作者としては私の絵本の世界観を壊さない翻訳は素晴らしいと思った。
- ・韓国在住で日本語に触れる貴重な機会。このような機会が定期的に行われるといいと思った。

# 参加学生の声

## ●やさしい日本語の社会的な役割

例) (やさしい日本語は) 日本に住む外国人や高齢者、障がい者など、日本語をツールとして情報を収集する、多様な個人に対応するものである。(M-2)

例) やさしい日本語は今後J大学に来る留学生にも使っていけるようになりたい。(J-10)

## ●日本語の変種における葛藤

例) 全てを簡単で読みやすい表現に変えてしまうのも物語の深みを奪ってしまうような気がして、2つのバランスを取るのも難しい。(J-6)

## ●専門分野を生かした協働による実現

例) お互いの得意分野を活かし、共同で良い作業ができた良い機会だった。(M-5)

## ●協働に関する今後の課題

例) 途中経過も共有して翻訳完成に向けた相談をお互いにできていた方が、具体的な内容に触れた交流ができたのではないかと感じる。(M-3)

# 本プロジェクトにおける学習者の学びと意義

翻訳



リライト



社会／個人の中のことばを豊かにする仲介活動

多言語の必要性の認識

複言語への意識化

自分の専門性・スキルの活用

自分の役割と協働することの重要性の再認識



本会合の「インクルーシブな社会の実現のために言語教育は何ができるのか」というテーマに照らして

翻訳という営みは人々が異なる文化や異なる言語の存在を認識し、異なる他者をどう理解し、彼らとどう「共に」生きていくかを自ら考える機会となる（坪井睦子，2020:9）。

学習者と教師がなんのために翻訳を行うのか、それは社会の中でどのような意味を持つのか、誰が幸せになるのか考え、現時点で「ことばの役割」と「自分の社会的役割」を認識し、行動することで、インクルーシブな社会の実現するために言語教育が一步前進できる。

# 参考文献

- 坪井睦子 (2020) 「グローバル化と翻訳」 『よくわかる翻訳通訳学 (鳥飼玖美子 編著)』 ミネルヴァ書房 pp.8-9
- 山田優 (2020) 「翻訳者の役割」 『よくわかる翻訳通訳学 (鳥飼玖美子 編著)』 ミネルヴァ書房 p.45
- 吉島茂・大橋理枝訳 (編) (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (外国語教育Ⅱ)』 朝日出版社
- Council of Europe(2018) *Common European Framework of Reference of Languages: Learning, teaching, assessment- Companion Volume with new descriptors*. <<https://rm.coe.int/cefr-companion-volume-with-new-descriptors-2018/1680787989>>
- NPO多言語多読サイト 参考資料「レベル分けについて」  
<https://tadoku.org/Japanese/references/>